

『平成新修古筆資料集』補訂稿

田中 登

はじめに

おおよそ昭和四十年代ごろまでの古筆研究は、『古今和歌集』
でいえば、高野切に関戸本、本阿弥切に曼殊院本など、平安時
代書写の一般品の切が中心で、現存する遺品の数でいえば、平
安時代のそれに数倍するという鎌倉期の名もない切が、ともし
れば軽視される嫌いがあつた。

そこで、この道の先達である藤井隆氏と相計つて稿者が出し
たのが『国文学古筆切入門』全三冊（和泉書院、昭和六十年（
平成四年）であつた。同書は藤井・田中両人が所蔵する鎌倉期
を中心とした古筆切を図版として収め、その解説を加えたもの
であるが、これは著者たちが想像していた以上に多くの方々か
らの支持を得ることができ、まことにうれしき限りであつた。

そこで、これに勇気付けられた私は、構想も新たに、やはり

手許の古筆切を使って、『平成新修古筆資料集』全五冊を思文閣
出版から刊行した。五冊の刊行年次を記せば、以下のとおりで
ある。

【平成新修古筆資料集】第一集 平成十二年三月

【平成新修古筆資料集】第二集 平成十五年一月

【平成新修古筆資料集】第三集 平成十八年一月

【平成新修古筆資料集】第四集 平成二十年九月

【平成新修古筆資料集】第五集 平成二十二年九月

かくて、小冊子ながら全五冊で、都合五五六点もの古筆切を
図版として紹介し得たばかりではなく、第五集の巻末には、全
五冊分の筆者・切名・書目の各索引を付して、利用者の便をも
計つたのであるが、現時点に立つて考えてみると、切の認定や
ツレの同定にいささかの訂正を要する点も見られ、かつまた『資
料集』刊行後に新たに知られた重要な情報などもないわけでは

ないので、以下、そうした事柄につき、覚書的に記しておく
い。

後光厳天皇 六半切（源氏物語）

第一集所収。若紫巻で、一面十行詰。後光厳天皇の源氏物語は数種類伝わっているが、新撰古筆名葉集のいう「六半 源氏歌一行書」というのには該当しないだろうと、解説では記し、ツレの有無については何ら触れるところがなかったが、実は、小松茂美氏の『古筆学大成』第二十三巻（講談社、平成四年）で、後伏見天皇の源氏物語切（一）として紹介されている二葉（いずれも若紫巻）とツレの関係にあることが判明した。古筆見の鑑定に相違があったわけである。書風からすると、後光厳より後伏見の方がふさわしいように思われる。なお、新撰古筆名葉集の後伏見天皇の項には、「同（六半） 源氏」という記述も見られ、当該断簡がこれに該当する可能性はあろう。

九条教家 山井切（和漢朗詠集）

第一集所収。新撰古筆名葉集の九条教家の項に、「山井切 朗

詠歌二行書墨罝朱星アリ」とあるが、現存する山井切はよほど珍しいものとみえて、『古筆学大成』第十五巻（講談社、平成二年）も、藻塩草所収の二葉を収めるにすぎない。第一集には、朗詠集は上巻秋部の菊の条の分類題「菊」とそれから冒頭の七言二句を収める切を紹介したが、当該断簡は天地に各一条の墨罝があるのみならず、各行間にも罝が施されており、一方、藻塩草所収の山井切には、この行間を分かち罝は見られない。したがって、当該断簡は山井切とは別の、教家を伝称筆者とする巻物切朗詠集とすべきであった。ちなみに、『古筆学大成』には、山井切とは別に、教家の朗詠集切を二種収めているが、当該断簡はそのいずれともツレとは思われない。

藤原行成 荒木切（古今集）

第一集所収。荒木切の筆者については、藤原公任と伝えるものもあるが、それはともかく、当該切について解説で寸法を記すのを失念していた。改めてここに記せば、縦二〇センチ、横八・六センチほどとなっているが、これはけっして荒木切の原寸ではない。春名好重氏の『古筆大辞典』（淡交社、昭和五十四年）では、荒木切について、縦二〇・七センチ、横一五・九セ

ンチの幅の広い本で、一面の行詰については、十―十五行の不定とする。第一集所収の切は、横が八・六センチで、一面に五行が記されているから、これはおよそ五行分が切り取られている計算になろう。

慈寛 四半切（玉葉集）

第一集所収。当該断簡の筆者が慈寛とされていることについて、「後世さほど名が知られているわけでもない慈寛を、古筆家がわざわざこの切の筆者と極めているのは、案外確たる証拠―自筆署名入りの奥書のある本を切ったなど―があつてのことではなからうか。慈寛の真跡資料の出現を期待したいものである」と同書の解説で記したが、その後、佐々木孝浩氏が「伝慈寛筆玉葉集切の考察」（『古典資料研究』第一号、平成十二年）と題する論考の中で、この慈寛の玉葉集切の奥書を紹介しておられる。その奥書とは、「正和三年潤三月九日書了／執筆西山磐木慈寛（花押）」とあるもので、これは、『玉葉集』が正和二年（一一三二）十月に完成した、わずか半年ばかり後のことであり、まことに注目すべき資料といえよう。ただし、世に慈寛筆の玉葉集切と称するものには、微妙に筆跡が異なる二種類のものが

伝存しているらしく、その点は注意を要する。

甲 「続国文学古筆切入門」所収切。二四・二×一五・一センチ。一面十行詰。

乙 「平成新修古筆資料集」第一集所収切。二三・九×一四・四センチ。一面十行詰。

佐々木氏が紹介された奥書は、甲種の断簡に付されているものであり、乙種のものではない。だが、乙種のものも甲種に比べて、さほど書写年代が下るとは思われず、今後とも注意すべきものといえよう。

藤原定家 明月記切

第一集所収。当該断簡は定家の自筆で、「廿八日」に始まる全文四行からなる断簡。転写本などでも現存しない部分であるが、その記載内容の年次について、解説では、田淵句美子氏の「新出『明月記』断簡」（『明月記研究』第四号、平成十一年）の論考に従って、寿永年間（一一八二―一一八五）もしくは承久年間（一一一九―一二二二）頃のもの、としたのであるが、その後、五味文彦氏の「『明月記の史科学』（『青史出版』平成十二年）が出て、嘉禄元年（一二二七）五月二十八日の記事である

ことを明らかにされた。ここでは、それに従いたい。ちなみに、明月記研究会編『明月記研究提要』（八木書店、平成十八年）の「明月記」原本及び原本断簡一覽」でも、五味説に拠っている。

壬生隆祐 六半切（古今集）

第二集所収。伝称筆者の壬生隆祐の「祐」の字を、タイトルを含め、解説において全五箇所、すべて「佑」の字に誤っていた。ここに謹んで訂正したい。なお、壬生隆祐は、藤原家隆の息で、『新勅撰集』以下に四十余首入集した勅撰歌人。家集に『隆祐集』がある。

世尊寺定成 六半切（新古今集）

第二集所収。この切のツレについて、解説では次のように記した。「この伝定成筆切はよほど珍しいものと見えて、ツレの断簡は少ないが、『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』には、巻十四恋四の切が一枚収められている。なお、『古筆学大成』にも世尊寺定成筆と称する新古今集切が一葉収められているが、それは四半形冊子本の断簡で、掲出のものとは完全に別種のものである」。

しかし、『古筆学大成』第十一卷（講談社、平成三年）に二種収められた世尊寺行俊の新古今集切の内、『大成』が（二）と分類したものが、実は、当該断簡のツレであることが判明した。その書写年代について、『大成』の解説は、「この書風は行俊の活躍年代よりもはるかに遡る時代の様式を示す。暢達した筆致、勁い筆線。鎌倉時代、十三世紀から十四世紀初めのころの書写であろう」とする。当該断簡の筆者に関する異伝として記憶に留めておく必要がある。

世尊寺行尹 四半切（新古今集）

第二集所収。当該断簡のツレの存在について、解説では、『古筆学大成』を繙いてみると、世尊寺行尹の新古今集切は二種収められているが、どちらも掲出断簡とは別種のもので、ツレではない」と記したのだが、『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』（風間書房、平成十一年）に世尊寺行俊の四半切として収められているものが、当該断簡のツレと思われる。これまた筆者に関する異伝とすべきであろう。ただ、切の書写年代からすると、行俊では年代が下がりすぎで、行尹の方が時代相応というべきか。

第二集所収。新撰古筆名葉集の家長の項に、「巻物切 四半形朗詠」とあり、これに該当すると思われる見ぬ世の友の切に、龍田切なる名称が付されているので、現在では、もっぱらこの切名が使われている。さて、第二集所収の当該断簡は、朗詠集下巻の仙家の項の、七言二句が二首と和歌が一種、新編国歌大観番号でいえば、五五一―五五三番の箇所に該当する。ところが、「古筆学大成」第十五巻には、当該断簡より一首前の五五〇番から、当該断簡の部分をつくり含み持つ五五三番までの切（二三八図）が図版として紹介されている。はたして、これをどう解釈したらよいのであろうか。両者は、漢詩においても、和歌においても、改行箇所に相違が見られるし、また和歌の字母にも少なからず違いが見られるので、一方が今一方を模写したというわけではなさそうである。現在のところ、これといった成案も持ち合わせていないが、とにかく、当該断簡と重なる箇所を持つ切が、他に存在していることだけは、ここに指摘しておきたい。

第二集所収。兼好の名を冠した新古今集切は数多く、「古筆学大成」第十巻（講談社、平成三年）にも八種もの切が収められているものの、当該切はそれらとはまた別種のものである旨、解説では記した。だが、「古筆学大成」の同じく第十巻で、二条為親の新古今集切（一）と分類された切とツレであることが判明した。筆者に関する異伝として注意すべきものであろう。

越部局 四半切（古今集）

第二集所収。当該断簡のツレについて、「古筆学大成」第五巻（講談社、平成元年）に三葉見える旨、解説では指摘しておいたが、この越部局の名を冠する一連の古今集切は、実は藤原為家、筆野路切の、筆者に関する異伝であることが判明した。なお、「大成」では、この越部局の古今集切とは別に、為家の野路切について一項目を立て、そこでは図版として六葉を収めていることを、付記しておこう。

後伏見天皇 久米切（新古今集）

第三集所収。新撰古筆名葉集の後伏見天皇の項に、「久米切六半新古今歌二行書」とあり、これに該当する切が藻塩草に見えている。寸法は縦一五・三センチ、横一六・三センチの一面十二行詰。この藻塩草の久米切とツレの關係にあると認定して、当該切を紹介したのだが、六半切という点や、一面の行詰など、両者の書誌的条件は一致するものの、よく見れば筆跡が微妙に異なっているようである。当該切はむしろ「古筆学大成」第十一巻所収の後円融天皇の新古今集切のツレとみなすべきであろう。ちなみに、「続々国文学古筆切入門」（和泉書院、平成四年）に久米切として紹介されている切も、当該断簡同様に後円融天皇のものとするのがよからう。

藤原家隆 升底切（金葉集）

第三集所収。第五集にも今一葉を収載。新撰古筆名葉集の藤原家隆の項の筆頭に挙げられ、見ぬ世の友・翰墨城・藻塩草などと国宝手鑑類にも見えている著名な切であるが、第五集刊行後、海野圭介氏「正宗敦夫旧蔵升底切『金葉和歌集』考」（伊井春樹

編「日本古典文学研究の新展開」笠間書院、平成二十三年）が発表され、升底切の巻七の十の零本の存在が明らかにされた。同本は途中何箇所にもわたって脱落箇所があるとはいえ、これまで知られていた升底切の遺品が一举に何倍にも増えたことになるわけで、これは古筆研究の立場からいってまことに意義深い報告といえよう。新出本の全容（できれば影印で）が一刻も早く公にされることを期待したい。

慈寛 四半切（続古今集）

第三集所収。新撰古筆名葉集にも、これに該当すると思われる記述はなく、現在のところまだツレは見出していない旨、解説では記したが、当該切は伝称筆者こそ違え、一般には冷泉為秀の三好切と呼ばれている切であることが判明した。三好切は、新撰古筆名葉集の為秀の項の筆頭に、「三好切 四半続古今歌二行書入少アリ」として出ており、藻塩草にも収められているものだが、現存する遺品はさして多くはない。三好切の今後の調査においては、為秀のみならず、慈寛という伝称筆者にも注意を払う必要がある。

藤原為家 四半切 (大和物語)

第三集所収。従来その存在がまったく知られていなかった為家を伝称筆者とする大和物語の断簡を紹介したのだが、当該切の段数を「第二十三段」と記したのは間違いで、正しくは「第三十二段」であった。謹んでここに訂正しておく次第である。

二条為氏 四半切 (新古今集)

第三集所収。「古筆学大成」第十卷には、為氏の新古今集切が四半切で七種、六半切で二種と計九種も収められているにもかかわらず、当該断簡とツレとおぼしきものは見当たらない旨、解説では記したが、「古筆切影印解説Ⅲ新古今集編」の冷泉為秀を伝称筆者とする四半切(第八六図)が当該断簡とツレの関係に当たるものと判断される。ただし、同書では、この第八六図の切を、同じく為秀を伝称筆者とする四半切新古今集(第八五図)と同種のものとして扱っているようだが、この第八五図と第八六図とでは筆跡が異なり、両者は別種のものとするべきであらう。

冷泉為秀 六半切 (新古今集)

第三集所収。「古筆切影印解説Ⅲ新古今集編」には冷泉為秀の六半切の新古今集が二種収められていながら、いずれも当該断簡とは別種である旨、解説では記したが、「古筆学大成」第十卷で冷泉為秀の新古今集切(三)と分類された切が、当該断簡のツレと判断される。新撰古筆名葉集の為相の項に、「同(六半)新古今歌二行」とあるが、これでは記述があまりにも簡単にすぎ、果たして当該断簡がこれに該当するかどうか判断しきれない。

津守国夏 四半切 (後撰集)

第三集所収。その本文が通常流布の定家本と違い、片仮名本や二荒山本に近いことで注目される切だが、筆者に関する異伝が多いことは注意を要しよう。すなわち、当該断簡には津守国夏という極めがなされているが、「思文閣墨蹟資料目録」第三〇三号に載る切には坊門局とある旨、解説には記したものの、その後の調査で、さらに次のような事実が判明した。まず「古筆学大成」第七卷(講談社、平成二年)において二条為氏の後撰

集切(一)と分類されているものが、伝称筆者こそ違え、当該断簡のツレに他ならないこと、さらにまた、古書目録「阪急古書のみち」(平成二十二年)掲載の阿仏尼筆と称する四半切の後撰集(藍紙の料紙)もやはりその筆跡から当該断簡のツレと認めるべきことなど。現存枚数がさして多いわけでもないのに、筆者に関する異伝がこれほど見られるのも珍しいことではある。

小倉実名四半切(藤葉集)

第四集所収。康永四年(一二四五)小倉実教によって編まれた藤葉集は、現在十本ほどの伝本が知れているが、いずれも巻一春〜巻六恋下までの欠本にすぎず、またこれといった有力な伝本に恵まれず、『新編国歌大観』も群書類従本を底本にしているほどである。しかし、古筆切の中には、藤葉集が成立した時期をさほど下らない、南北朝の後半頃に書写されたものもあって、注意されるのみならず、さらに同集の散逸部分の内容を伝えるものもあり、看過できないものとなっている。当該断簡などもまさにそうした切であったが、その後、今一葉散逸部分の切を入手する機会に恵まれたので、ここに紹介しておきたい。寸法は縦二二・三センチ、横一五・二センチで、一面七行詰。

全文は以下のとおり。

さくはなのわれとうつろふ色なくは

風のつらさになしやはてまし

中臣祐成

我とちるならひは花にかこつとも

風のとりを猶やうらみむ

正三位教氏

さそひしはつらさなからも今はた、

落花が詠まれているが、巻一の春部には見えず、その内容からして、おそらく雑部の切と思われる(巻末図版参照)。

顕昭 建仁寺切(源氏釈)

第五集所収。顕昭の建仁寺切は、その書写内容が、源氏釈と源氏物語の和歌作者目録(従来は系図といわれていた)とからなっているが、当該断簡は源氏釈の方で、手習巻のもの。ただ、解説では、この切の模写断簡がすでに池田亀鑑『源氏物語大成』(中央公論社、昭和二十八年〜三十一年)の研究篇に紹介されていることを失念していた。同書によれば、当該断簡は竹柏園所蔵のもので、「筆者摸本」として図版で掲載されている。したが

つて、本断簡は、その原本の出現ということになろう。

おわりに

以上、平成二十二年の九月に刊行し終えた拙著『平成新修古筆資料集』全五冊につき、刊行後に気づいた点や、諸家から指摘を受けた点などを中心に、現時点で補訂すべき事柄について、あらあら記してきた。いまだ不十分な点については、今後さらに機会を得て補っていきたいと考えている。

最後になったが、本稿を草するに当たっては、小林強氏から多大な御教示を忝くしたことを、ここに記して謝意を表したい。

(たなか のほる / 本学教授)

